

とうかいどうちゅうし

#30 東海道中詩

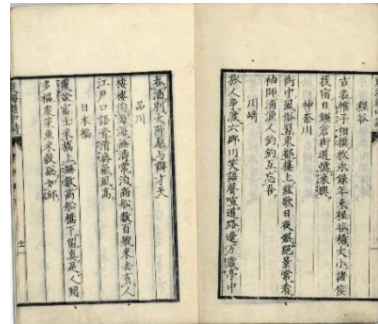
作者：小畑詩山（おばた・しざん 1794-1875）

刊行：天保8年（1837）


 解題

■ 内容

京都から江戸の日本橋に至る東海道中の宿場に約28字の短い漢詩（七言絶句）をつけた紀行詩。ジャンルとしては「狂詩」とされる。「狂詩」と



[K94/7]

は、『広辞苑』（岩波書店 1991年）によれば、「江戸中期以後流行した、滑稽を主とした漢詩体の詩。俗語を交え、多く平仄（ひょうそく）をふみ、押韻をなす。」とある。

各宿場の情景に加え、旅人や宿場の人々を生き生きと描いており、広重の「東海道五十三次」に詩をつけた趣となっている。大窪詩仏（1767-1837 漢詩人）の序文や大槻磐溪（1801-1878 玄沢の子。儒学者）の引（短い序）がある。

なお当館所蔵本には「小雨荘蔵」「茶烟書庫」の印が押されており、書物研究家、装丁家の斎藤昌三（1887-1961）の旧蔵資料と思われる。

■ 作者

医者・漢学者。本名は小畑行簡。通称は良卓、字は居敬、号は詩山・真隠・居敬堂。陸前国（現在の宮城県にあたる）志田郡古川生まれ。江戸で医を学び、経史・詩文をも学ぶ。江戸鉄砲州に医を開業し、儒学を教えた。また歴

第3章 文芸

史を好み、多くの詩文集を著した。亀田鵬斎（1752-1826 儒者）、朝川善庵（1781-1849 儒者）、菊池五山（1769?～1849? 漢詩人）、大窪詩仏、梁川星巖（1789～1858 漢詩人）らと交遊があった。

別の著書『漫遊詩草』では長崎から旅立ち、天草、福岡、広島から神戸、奈良、伊勢、箱根から江戸、仙台、松島、青森に至る旅の間に詩を詠んでいる。『東海道中詩』の奥付の「著述目録」によれば、他の著作に『詩山雜咏』『詩山堂詩草』、『詩山堂詩話』がある。詩集のほかに、『梅瘡秘訣』など医学書の著作もある。



本文を読む

<影印>

「東海道中詩」（『紀行日本漢詩』第3巻 富士川英郎・佐野正巳（共）編 富士川英郎解題 汲古書院 1992）[919.5/109/3]



参考文献

荒尾禎秀「狂詩の漢字語：『東海道中詩』の場合」（『清泉女子大学紀要』（60）2012）[Z0513/30] ※清泉女子大学機関リポジトリで閲覧可能